

## 謹んで安部一成先生を偲ぶ

復旦大學 鄭 勵 志

尊敬する安部一成先生がご永眠なされてから早2か月が立ちました。安部先生を懐かしく思い続けております。2011年10月26日の深夜、復旦大學日本研究センターの同僚戴曉芙先生から日本山口大学名誉教授、復旦大學顧問教授の安部一成先生がご永眠なされましたことを知らされました。覚悟はしておりましたが、やはり驚愕と悲痛に耐えませんでした。丁度翌早朝杭州へ行くことになっていましたので、出発前匆匆に、日本研究センターを代表して安部先生のご遺族に千字近くの弔電を送りましたが、それだけでは意を尽くせず、また何かを書いて復旦大學の古き、親しき友人、そして私の良師益友たりし安部先生を祈念しようと考えておりました。

安部先生は1927年のお生まれで、日本の名門大学の一つである神戸大学大学院を卒業され、経済学博士号を取得されました。長期に渡って国立山口大学経済学部の教壇に立たれ、経済学部長を連続三期務められ、定年退官まで大いにご活躍なされました。

山口県は日本本州の西端に位置しており、徳川幕府時代の長州藩の本拠地人傑地靈の地であり、明治維新の時に薩摩（今鹿児島県）とともに大いに活躍し、大きな役割を果たしました。名勝旧跡も多く、政治家が輩出、47都道府県の中で総理大臣を一番多く出した県でもあります。

安部先生は有名な経済学者であられますと同時に、声望の高い社会活動家でもあられました。山口市、山口県及びその周辺地域で大きな影響力を持たれ、山口大学からご退官された後は、西南学院大学の教授を務められ、その後は下関にある東亜大学の学長、萩市にある萩国際大学学長としてご活躍なされました。それ故に、日本全国各地に教え子が多くおり、正に「桃李満天下」で山口、大阪、東京都に安部ゼミの同窓会と定期刊行物があり、その盛況は日本でも珍しいものと思われれます。

私と安部先生のご縁は上世紀の七十年代に始まります。1979年8月、改革開放をスタートしたばかりの中国事情を視察するために、山口大学学術代表団が中国を訪問なされ、復旦大學にも見えられました。その時、安部先生は副団長を務められ、私は復旦大學で接待役兼通訳ということで、訪中団と密接にふれあいました。会談中、私は自分の叔父がかつて国立山口高等商業学校（山口大学の前身）に学び、卒業したことを、私も山口高等商業学校（当時当校には中国科があった）に憧れていたが、戦争や学資金不足のこともあって、実現できなかったことを話したら、じっと私の話を聞かれていた安部先生は突然立ち上がって私の手をしっかり握り「よく分かりました。縁があったのだ」と

言われました。それで初対面でありながら、距離が急に近くなり、色々の話に花を咲かせました。安部先生は私に、日本を訪問する機会があったら是非山口にも足を伸ばしてくださいと何度もおっしゃられました。その後、私は、1980年日本国際交流基金のお招きで東京大学社会科学研究所に1年留学の機会を得ました。その年に安部先生のお招きで山口大学を訪問させていただきました。私は発表したばかりの論文「戦後日本経済高度成長の歴史的背景」を提出して、山口大学経済学部の先生方と交流し、好評を得ました。当学部の名畑恒教授はご多忙中にもかかわらず、それをすぐ日本語に翻訳されて、山口大学東亜経済学会の機関誌「東亜経済研究」（1980年10月号）に掲載されました。安部先生は18,000字のこの論文に対して、約9,000字のコメントをお書きなされ、同刊に掲載されました。コメントの中で、安部先生は、当時の中国でこのような論文を書いたことは簡単なことではないことを評価し、論文の要旨は大方納得できるが、さらに検討する余地のある問題についてご指摘くださいました。それは、日本経済高度成長の原因に関する考え方において、私は技術革命の役割を強調したのに対し、安部先生は科学技術革命の要因はもちろん重要であるが、戦後日本の30余年の高度成長への寄与度は約30%程度で、私が論文で記述したほど高くなかったことをご指摘なされました。安部先生は、マルクス経済学理論に強いだけでなく、現代経済学もご得意でありました。先生は視野が広く、多様な研究方法を駆使なされたのに対し、自分は計量経済に弱いことを痛感しました。

今回の山口大学の訪問は、実り多い旅でした。そもそも私は1949年ひそかに台湾の故郷を離れて、祖国大陸に渡りました。50年代初期から台湾では白色テロが横行し、私は故郷の両親との連絡が取れなくなり、30年近く音信不通のままでありました。私は来日したものの、実家の現住所と電話番号を知らないので、連絡を取ることができず、悩んでいました。それで、山口に来て安部先生に山口高商のOBであった叔父の状況をお調べいただき、すぐに状況が分かりました。私は急遽東京に戻り、同じく東大に留学し、親しく付き合っていて、間もなく台湾に帰られる台湾中興大学の林教授に手紙を託し、台北にいる私の叔父に渡していただくことにしました。するとすぐに叔父と実家との連絡が取れ、年老いた父親は30年消息のなかった息子がまだ生きていることを知ってうれし涙を流しました。間もなく父は叔父に伴われて東京に駆け付け、長年会えなかった長男と初めて見る嫁に会い、一家団欒し、ドラマのような再会を楽しみました。また、若干年後、安部先生は台湾旅行中、わざわざ田舎に居る家父を慰問してくださいました。私達一家は安部先生に心から感謝いたしております。

1982年11月、安部先生は復旦大學世界経済研究所（当時私は当研究所日本経済研究室主任を務めていた）の招請で再びご訪中され、まず先生ご夫婦で西安、無錫、杭州を訪

問してから、先生お一人で約2週間上海に滞在し、復旦大學と上海市日本研究会で講義を持たれました。復旦大學では主に世界経済学科、経済学科、管理学科、政治学科、歴史学科の教師と学生を対象に、日本経済の現状と抱えている基本課題、日本産業構造と産業組織、日本経済計画の諸問題点、日本経済学界の状況などについて4回の講義をなされました。当時は「文化大革命」の混乱後で、復旦大学の教師、学生たちは特に求知欲が強く、更に全世界が日本経済に注目した時代だったため、聴講者は毎回100人を越えていました。季節は初冬で、講義が終わる午後5時の薄暗い中、復旦大學の教室はみんな電灯が煌煌と輝いて、夜自習する学生が一杯詰まっていました。その様子をご覧になって安部先生はとても感動なされ、何度も私に「日本ではこのような風景はもう見られません。中国の晴れある将来を痛感している」と語られました。上海市日本研究会（上海日本学会の前身）で行った2回の講演は日本経済における中央と地方の関係、日本の政治・経済・軍事・社会概況に関するもので、とても歓迎されました。その後、安部先生と復旦大學の関係はますます緊密になりました。1985年と1989年、私が復旦大學教授訪日団を連れて日本を訪問した際は、2度とも山口大学を訪問させていただき、安部先生から手厚いおもてなしを受けました。みんなは安部先生のご自宅に招かれて、大変な御馳走に預かりました。このことをみんなは今も忘れていません。

20世紀80年代末、私は復旦大學学長謝希德先生の指示を受けて、日本研究センターの設立の準備にとりかかりました。安部先生からもいろいろなアイデアを頂いた上、個人の寄付金も頂きました。1990年日本研究センターが正式に発足し、安部先生から学術の面でたくさんのご支援を賜りました。日本研究センターは1991年から中国経済建設が直面している問題をテーマに毎年国際シンポジウムを催してきましたが、安部先生は90年代の毎年のシンポジウムにほとんどご出席くださり、論文発表をなされてきました。例えば、第一回目の国際シンポジウムには「産業組織、産業構造と物価」；1992年の第二回目国際シンポジウムには「日本の中小企業の活力」；1993年の第三回目シンポジウムには「地域産業政策の変遷と将来の課題」；1994年の第四回目シンポジウムには「高齢化社会の保障問題」というテーマでご報告なされ、理論と日本の経験、教訓を紹介してくださいましたことは誠に貴重な交流でした。

安部先生は国際シンポジウム参加や講演、講義でよく復旦大學に見えられ、回数を重ねていくなかで多くの中国友人が出来、先生の上品な気質と大きな親和力は、日本研究センターの専任スタッフ、兼任研究員及び全国各地からシンポジウム参加や講義聴講に集まった諸大学の人たちに親しまれました。国際シンポジウムの際には必ず安部先生の周囲に多勢集まって話を楽しみ、笑声が爆発し、独特の美しい風景線を描いていました。この光景は誰でも忘れられません。

安部先生は復旦大學の學術活動に大きく貢献なされた故に、1993年11月に復旦大學顧問教授になられ、ご永眠なされるまで続きました。安部先生は私達の日本研究センターのもう一人の恩人である伊東光晴先生とも親しく、90年代中期私と同僚沈浩さんと二人で安部先生ご夫婦、伊東光晴先生ご夫婦を中国の古都西安の旅にご案内致しました。人気の兵馬俑や楊貴妃の墓所等を見学し、四方山話に花を咲かせ、本当に楽しい一時をご一緒させていただきました。

今世紀の初めごろ、安部先生が前立腺がんを患われ、すでに末期であると伺い、私は大変驚き、不安を覚えました。日本訪問時に私は山口市に赴いてお見舞いに参上しました。健康診断をおろそかにしたため発見が遅れたことや日本の優良な医療でも「長くて三年しか生きられない……」と医師に言われたことも語られました。私は日本研究センター一同を代表してご慰問し、困難を乗り越えてまたお元気な姿で復旦大學を訪れられるよう祈願致しました。2005年私が再び山口にお見舞いに参上したときには、先生は私に「生きている間に復旦大學をもう一度訪問し、懐かしい友人達やかわいい学生たちに再会したい」とおっしゃられました。先生のご希望に沿え、私たちは2006年に安部先生をご招請しました。先生は娘さんに伴われて来訪なされ、「日本経済の新しい局面とそれに関する論争」というテーマでご講演なされ、多くの教師と本科生、大学院生が聴講しました。先生は私に「この機会を与えてくれてありがとう。復旦大学の学生さんは相変わらずまじめでかわいい」と言われました。2007年暮春私はまた訪日の機会を得て、東京から山口市に赴いて、安部先生をお見舞いし、先生ご夫婦から相変わらず厚いおもてなしに預かりました。ホテルの日本料理屋に招かれ、私達の長年の友情を語り合いました。しかし、その時の安部先生はお氣力がなさそうで、だいぶやつれたご様子でした。病気が見つかったから「三年の期限」はだいぶ超えていましたが、やはり治癒が難しいだろうと一抹の寂しさにかられました。思えば先生と知り合い、知遇を得てからもう30年近くの月日が流れました。その間先生は復旦大學に十回以上お見えになられ、私も十回近く山口を訪問させていただきました。私が山口へ参上するたびに、先生ご夫婦から手厚いおもてなしをいただきました。毎度先生ご夫婦は奥様が運転なされる車で私を新山口駅に送迎し、ご自宅やホテルでご馳走に預かり、山口県下の市町村と企業や名勝旧跡をご案内してくださいました。また、私と家内で先生ご夫妻を拙宅にお招きして、上海蟹を召し上がっていただいたことも何回かありました。思い出はとめども尽きません。この度は日程の関係でその日に東京へ戻らなければならなかったが、先生ご夫妻はお嬢さんが運転する車で相変わらず私を新山口駅まで送ってくださいました。プラットホームでお別れするのが本当に辛かったです。そしてそれが本当に安部先生との最後のお別れになってしまいました。

安部一成先生はまた長期に渡って日中友好事業に熱心にご参加なされ、山口県と山口市の日中友好協会の責任者の一人でもありました。山口市と済南市、山口県と山東省、そして山口大学と山東大学は姉妹都市、姉妹省県、姉妹校でした。安部先生はその先頭に立たれてご尽力なされたと伺っております。日中両国の関係が起伏する中で、荆の道を切り開いて日中友好の道を歩んでこられました先生のお姿を偲んでは誠に敬服に耐えず、目頭が熱くならざるをえません。

2010年に復旦大學日本研究センターは創設20周年を迎えました。安部先生は闘病中にもかかわらず、下記のごとく懇切なメッセージを送って下さいました。「復旦大學日本研究センター御中：20周年記念を迎えられおめでとうございます。心からお慶び申し上げます。1979年夏、鄭勵志先生にお会いしてから貴大学とのおつき合いが始まり、深まっていきました。センターとの20年には思い出が沢山詰まっていますし、私の日本中国友好運動にとって貴重な存在でした。センターのこれからの益々のご発展を期待しています。私もできる限りの交流に勤めたいつもりです。山口市山口大学名誉教授安部一成 2010年9月18日」

こんなに思いやりのある、親しい友人がもっと長生きできなかったことは心の痛みに耐えません。

尊敬に耐えない安部先生がとうとう帰らぬ旅に立たれてしまいました。しかし先生のすばらしい学術成果、また中国に対する深い情誼、そして世界経済研究所と日本研究センターを含む復旦大學に対する厚い友情は私達の心に永遠に銘記されましょう。

復旦大学日本研究センターの恩人安部先生：ご一生本当にお疲れ様でした、ありがとうございました。どうぞ安らかにお休みください。

2011年12月

原載復旦大學日本研究センター学術誌『日本研究集林』2011年下半年号。